

事後評価報告書

(日本－中国研究交流 研究領域「水質汚染対策技術」)

1. 研究課題名：「効率的排水管理のための毒性評価と毒性削減手法の開発」

2. 研究代表者名：

日本側：国立大学法人 横浜国立大学大学院環境情報研究院、教授、益永 茂樹

相手側：Dalian University of Technology, School of Environmental Science and Engineering,

Professor, QUAN Xie

3. 総合評価： B

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

中国側と連携して実施した実廃水での試験で、バイオアッセイ試験による排水処理効果の評価事例を積み上げたことは、日本で開発された化学物質のリスク評価管理技術の国際的な普及につながる成果であり高く評価できる。その結果として環境学分野において定評があるジャーナルに共著論文3編が発表されたことも十分な成果と言える。一方で適用されたバイオアッセイ手法自体に新規性や革新的な進歩を読み取ることができず、従来手法の適用内に留まっているように見える。中国で下水処理された被検水を日本に持ち込んで評価する計画が変更を余儀なくされているが、生物処理した水は、量的な問題以外にも、検疫などの問題で輸入が容易でないことは、当該分野の技術者であれば当然承知しているべき事項であり、当初計画を慎重に検討しておく必要があったのではないかと。

(2)交流活動の評価について

中国側の大学院生を毎年30日間2名ずつ日本側で受け入れ、中国側の試料を中国側でバイオアッセイできるように技術普及したことは、将来に向けた人的ネットワーク構築に有効であったと判断できる。また、交流活動を活用することにより、日本で構築された汎用生態リスク評価管理ツール(AIST-MeRAM)の中国展開に道筋をつけることができおり、本事業により有効に機能した成果の一つ考えられる。中国側は若手研究者の長期滞在を含めて数多く来日しているものの、日本側の訪中は1年目と3年目にとどまっており、同程度とした方が「交流」としては望ましかった。

(3)その他

今後、日本側が研究対象として興味深いフィールドを中国側にさらに提供してもらうなどのアクションにより、持続的な交流に結びつけることが期待される